

新潮文庫

# 稽山節考

深沢七郎著



新潮社

考 節 山 櫛



定價は帯またはカバー  
に表示してあります。

新 潮 文 庫 草 136 A

昭和三十九年七月三十日 発行  
昭和四十五年二月二十日 七 刷

著 者 深 沢 七 郎

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵 便 番 号 一 六 二

東 京 都 新 宿 区 矢 来 町 七 一

電 話 東 京 (〇三)二六〇二二一

振 替 東 京 八 〇 八 番

落子、乱丁のものは本社又はお買求め書店にてお取替えいたします。

② 印刷・株式会社金羊社 製本・憲專堂製本所

© Shichirô Fukazawa 1964 Printed in Japan

新潮文庫

橿山節考

深沢七郎著



---

新潮社版

1634



## 目次

|           |         |
|-----------|---------|
| 月のアペニン山   | .....セ  |
| 檜山節考      | .....三  |
| 東京のプリンスたち | .....五  |
| 白鳥の死      | .....一七 |

解説 日沼倫太郎

△楽譜 著者自筆▽



檣  
山  
節  
考



月のアペニン山

午後一時までに、そこへ行かなければならないのであった。まだ十時である。このアパートのどの部屋の人達もみんな出勤してしまっただろう、空家のような静かさである。そこへ行くことは半年も前から覚悟をきめていたのだけれども、今これから行くのだと思うとおちついていることが出来なく、いっそのこと早く家を出掛けてしまおうと仕度をすませたところだった。行く先は日比谷公園の近くである。渋谷駅近くのこのアパートからは地下鉄に乗れば十五分位で着いてしまうのだが、弁護士秋山先生とむこうで落ち合う約束ではあったのを時間つぶしに品川の事務所に行って秋山先生と一緒に出掛けることにしようと勝手に予定を変更してしまった。

朝の陽が窓にさしこんでいるが、冬の弱い光は霧の様に、汚れた肌衣のように映っていた。その風は寒いらしい。私は靴をはこうと下駄箱の中の靴を取り出した。ふと見れば片方の靴の先に髪の毛が一本のついているのが目についた。ふっと吹き飛ばそうと口笛でも吹くつもりで息をふきかけると髪の毛はさっと飛び去った。だが私の臉にはもっと沢山の髪の毛の束が焼きつけられたように残っていた。あの時の髪の毛が……。髪の毛に顎をあてて肩を握りしめながら慰めたの

だった。小きさみにゆれている髪の毛を見ていると、女の髪の毛は何と無数にあるものだろう、何んという細いものだろうと思った。輝いているように美しいものだと思いつながら眺めたのだ。その時、静江は泣いていたのだ。静江の髪の毛はふさふさとたくさん毛だった。静江と結婚してから私達二人は受難のカレンダーを削いで日をすごしたのだ。私達の結婚生活は至る所で世の人に責められたのだ。私達はそれを斯う考えた、私達は不運にも悪い奴等のところばかり住む運命なので、世の中というものはもつと善人の住んでいるところもある筈だから、いや、善人でなんかなくてもよいのだ、唯私達の生活に何の干渉もしないで住ませてくれればよいのだ。

私達はそんな環境の所を求めて何回も家移ったものだった。こんな条件の貸家だったら山の手方面にはいくらでもあるだろうと思った。隣家とは挨拶もしないでいられる東京の生活だからそんなことはわけないことだと思っていたけれども、不思議な程、悪条件の所にばかり越してしまった。

それは或る悪魔が私達の生活を訪れたからだ。その悪魔の仕事はいつも私の出勤した留守に亡霊のように訪れていたのだ。静江はやさしすぎる性質の女だった。私に対してさえイエスカノーかの返事もはっきり出来ない程で私の方が歯痒いと思う時もあるぐらいおとなしい性質であった。悪魔が襲来する時間も大体きまっていた。そんな馬鹿げたことが、今の世の中にある筈はないと思われるかも知れないが、実際私だって気がつかなかった。私は夢にも思わなかつ

た。

始め私達が家を持ったのは中央線の東中野駅から、十分位北に歩いて行った所だった。結婚したばかりだから楽しい筈であったのに静江は何んともなく元気でなかった。これは後で知ったことで、彼女はそんな風の性格の女性だと思っていたのだ。見合結婚ではあったが半年間もつきあってそんな性質だと思ひ込んでいたのだから……。

越して四五日目だったろう、夕方私が会社から帰ってきた時静江の姿が台所の方に見えた。

「只今！」

と元氣よく声をかけたがふり向きもしないのである。私は後に近づいて彼女の肩にそっと手をおいて軽く抱きかかえようとした。静江はしずかにこっちを向いて私の胸に顔をふせた。彼女の髪の毛は小さくゆれていた。泣いているのだ！ と知った。かすかにゆれている髪の毛の束は今でも私の臉にきざみつけられている程、女の髪の毛は美しかった。女は小児のようなものだ！ なんでもないのに一人でいると泣くんだなあ！ というぐらいにしか考えなかった。まさかあんな風に悪魔が襲来したのだとは誰だって知らないだろう。

それから二三日たって私達はどこか他の場所へ引越す相談をはじめた。静江が越そうと云い出したのである。この近所の人達はなんとなく私達を敵意の目で見るらしいのだ。そう云われれば私にもそんな風に感じられるのだった。いつだったか、私が会社から帰ってきた時だった。すぐ手前の家の奴が垣根ごしに私の顔を覗いていたことがあった。まるで私が犯罪者でもあるかのよ

うな目つきで見ているのである。そんなことがあったりして思い当ることがあったので、私も静江が移転をしようと云い出した時はすぐその気になった。私達は適当な家を見つけるまで一ヵ月もの間、嫌だ嫌だと思ひながら耐え忍んですごしたのだ。それから吉祥寺の駅からバスで二十分も行った所で、畑もある空気のよい場所に家を見つけることが出来た。ここは隣の家も小道で離れて四五軒あるだけで、私達の家はその四五軒とは特に離れていた。

だが、ここでも求めていた安らかな生活はなかったのである。ここでも静江は、やっぱり近所の人達がつらいと云うのである。この近所の人達は乱暴をさえするというのだから留守居をしている静江はたまったものではないらしい。小さな子供にけしかけて家の中に石を投げこんだり、買物に出てゆく静江を棒で追いかけたりもしたそうである。この時は交番に訴えたりした。かなり離れたところにある交番に行つて巡査に二時間も話してよく頼んだのであった。巡査は、  
「よくこちらから話しておきましょう」

と云つてくれたがそれだけだった。近所の人達の横暴さは止まないというのである。みんな私の留守の出来事であった。これらのことは皆あの悪魔の仕わざだったのである。そんなこととは知らず又家を越すことにきめた。次に越したところは渋谷からバスに乗って行く若林だった。

ここでも三ヵ月とたたないうちに、また越すことになってしまった。それから自由ヶ丘、大井町、蒲田と三年間に九ヵ所も移転したのである。しまいにしてもどこへも越すところがないではないかと思つた程だったが、最後に周旋屋の骨折りで江東区の南、海に近い南砂町九丁目の埋立

地に越したのである。

南砂町九丁目！ 広い埋立地。ここで私は近所の人の力であの悪魔を捕えることが出来たのである。ここは工場地帯だった。工場地帯といってもその中に住宅もところどころにあった。みな、工員の家族が住む家で、二十軒ぐらいまとまって建てられてあるブラック造りで遠くからは長屋のように見えるけれども一軒ずつ離れていた。

この家をさがしたとき周旋屋は、

「この人達は人情深い人達ばかりですよ、何しろ下町の人達は山の手の奥様たちとはちがいますよ、住んでごらんさい、隣り近所とは云っても親類と同じですからね」

こんな風に云ってくれて周旋屋も商売根性ばかりでなく喜んですすめてくれた。この住宅はどの家もすぐそばにある製鉄会社の所有で、その会社の従業員だけしか住むことが出来ない表向きの規定ではあったが、じゃの道はへびというのであろう周旋屋の腕は大したものので借りることが出来たのである。周旋屋はそのためにこの住宅地に住む人の家を他の場所に世話をしても私の方に貸してもらったのだそうである。越す前に私はここへ下見に来てすっかり気に入ってしまった。それは、私達の越してくるすぐ隣の杉村さんという一家の人とすっかり親しくなってしまう、その時に夕食まで御馳走になってしまった程であった。一度でそんなにまで仲良しになるとは想像も出来なかった位だった。杉村さん一家は七人家族で二人はまだ子供だが、母親の外は四人のおとなは近くの工場に勤めていた。奥さんという人が良い人で始めて逢った私に何んでも

話してしまわなければ気がすまないという様な話ずきの人らしく、戦争中の疎開の時の話などしているうちに自分の家の生活状況なども説明するために家計簿まで見せて、此の辺は物価も安く、住みよいところだから早く越してくるようになると親身になって心配してくれて、夕食なども食べなければならぬようになってしまったのである。

東京の東南の埋立地の南砂町九丁目——ここで私と静江は今まで想像もしなかった庶民の生活にとけこむことが出来るだろう、これが一番賢い方法かも知れないぞ！ とすぐ越して来たのである。私達一家を襲う悪魔を知ったのはこの杉村さん一家の協力のおかげであった。

越してきた翌る夜、私達は杉村さん一家を夕食に招待したのだった。それからどちらが自分の家かわからなくなってしまうたように親しくなって、下駄、石鹼入れ、食器、皿など、向うの家の物がこちらにきたまま、こちらのものが向うにあるというように親類以上のしたしきになってしまった。静江も明るく、笑顔も多いようになり、時には杉村さんの奥さんを相手に政治問題などを論ずることもあって、これはおとなしい静江の嬉々としたはしやぎ振りであった。私も会社で帰り仕度をするときなど、

「さあ、ユートピアに帰る時間となりました」

と冗談を云ったりしたのだった。

越してきてから半月もたった頃だろう、越してきたのは十月三日だと覚えている。あの台風がきたのが十月十六日だったから。その年は台風の多かった年で、二百十日は荒れなかったが、そ

の前後に大きい奴が四回もきた上、小さいのは十回以上も来た年だった。十月十六日の台風は小さい方で強風が一日中吹いただけで雨も大したこともなく夕方には止んだ程度で終った。もう夜の風は肌寒い時もあったので季節はずれの台風だった。それから二三日は上天気がつづいたのであの夜はたしか二十一日のことだ。夕食がすんでから杉村さんの奥さんと十九になる息子さんが話しにきて映画の話などしていた。その時に息子が思いがけないことを話してくれたのである。

それは精神的にだけ嫌なことで、迷信のようなことだったが、今まで貸家ばかりを探してきた私達には、部屋に関するかぎり神経質になっていたのだから特に大きく感じられたのである。私達の家も杉村さんの家も同じ造りで、玄関も台所も同じ広さで畳の敷いてある部屋は六畳間と四畳半の二部屋であった。杉村さん方は大勢の家族なので部屋も整頓してなかったが私の方は二人だけの上、新世帯だから何かと小綺麗にしてあった。電球なども杉村さんの方では六十ワットと四十ワットだが私達の方は両方とも百ワットをつけていた。だから杉村さんの人達は私の家にくると、「このうちは電灯があかるいね」

とよく云ったものだった。私の方ではそれ程にも思わないで、かえって杉村さんの家の方が大勢なのであかるいように思うぐらいだった。私と静江は六畳の方が寝間で四畳半の方はただ洋服だんすを置くだけで殆んど使っていなかった。その夜、猫の画いてある油絵の額を四畳半の壁に飾ることを思い出したので杉村さんの息子さんにも手伝ってもらい、飾りつけが終ったときだった。息子さんがその黒と白のブチ猫の絵を見ながら、

「お母さん、この絵の猫はたまによく似ているね」

と云うと、奥さんが、

「そうだね、目つきが一寸似ているけどこの絵のように立派じゃないよ」

と、絵を見ながら話し合っていた。私が、

「お宅にはたまという猫がいたんですか？」

ときくと息子さんが、

「前にこの家にいた人がたまという猫を飼っていたんですよ、ここのおじさんが死ぬ前、どこに行ったかわからなくなってしまったんですよ」

これをきいて何げなく、

「このうちの前にいた人は亡くなったんですか？」

とききかえすと息子さんは一寸目を光らせてこんなことを云った。

「この部屋に寝ていて死んだんです、その前にも若い娘がこの部屋で死んだんです」

私はこれをきいて嫌な感じがして、静江にそんなことを知らせたくないと思った。静江のいる六畳間の方を見ると、杉村さんの奥さんにお茶をついでいるところだった。奥さんにはこの話のきこえたのであろう息子の方をふりむいて、

「そんなつまらないことを云うものじゃないよ、病気で死んだんだもの」

私は静江の顔をみていたが、何んとも気にしていないらしい顔つきだったので私が氣を使います